第3種郵便物認可

廃炉現場 徐々に変化

福島第1原発 7千人地道な作業

過酷な作業環境のため、かつては「野戦病院」に例えられた東京電力福島第1原発の廃炉現場が少しずつ変わってきている。暑さや息苦しさで作業を難しくする全面マスクの着用エリアは縮小。給食センターや休憩所ができ、作業員は温かい食事を取って休めるようになった。今年3月で原発事故から5年。炉心溶融が起きた1～3号機の建屋に残る核燃料の取り出しに向け、ロボットや技術の開発が進む一方、現場では1日約7千人の手による地道な廃炉作業が続いている。

休憩所で温かい食事

東京電力福島第1原発の正門近くに立つ「大型休憩所」3階の食堂。平日の昼すぎに訪れると、約30人の作業員が集まっていた。2015年6月に運用が始まった食堂では、約9㌔離れた福島県大熊町の「福島給食センター」で調理した食事が提供されている。

「ご飯大盛りにしますか」。カウンターで配膳係の女性が尋ねる。メニューはフライ定食やハンバーグ定食、麺類などで、いずれも380円。ご飯の大盛りは無料だ。防護服を脱いだ作業員は食事をしたり談笑したりと思い思いに過ごす。一見普通の社員食堂のようだ。

「福島第1の担当になって1年になりますが、私が知る範囲でもだいぶ環境が良くなりました」と建設大手の鹿島東電福島土木工事事務所の佐用佳史さん（42）。以前はコンビニで買った弁当やカップラーメンを持ち込むしかなかったと作業員は食事をしたり談笑いう。

声通る防じんマスク

構内では、作業現場の放射線量を下げるため、汚染した地面を削り舗装する「フェーシング」と呼ばれる工事が進んでいる。かつて草木が茂っていた1～4号機西側の土手は一面灰色のモルタルで覆われていた。第1原発敷地の西側は建屋にたまり続ける汚染水を保管する円筒形のタンクで埋め尽くされている。

除染された3～4号機西側の土手を車で通過すると、放射線量は車内で1時間当たり17～18㍃だった。舗装前は100㍃以上あったという。

新たな汚染水タンクの建造が進む構内の西側エリアでは、作業員が鼻と口だけを覆う防じんマスクで作業をしていた。

多少の息苦しさがあるが、顔全体を覆う全面マスクに比べると圧迫感や閉塞感が少ない。

「声のこもる全面マスクとは違い、防じんマスクなら声が通ります。意思疎通も図れて事故の防止につながります」と東電担当者。現在、1～4号機の建屋内部や汚染水を保管するタンクのすぐ近くで作業する場合などを除き全面マスクの着用は原則不要だ。

しかし、どのマスクを着けるかは企業や個人の判断に任されており、まだ全面マスク姿の作業員の方が多い。

原子炉は高線量なお

敷地の放射線量が下がったといっても、炉心溶融が起き、原子炉圧力容器から溶け落ちた核燃料が残っている1～3号機は依然高く、まだ原子炉建屋内で人が長時間作業することはできない。

この日、3号機西側では、毎時250～300㍃が計測された。付近の作業員は被ばくを抑えるため遮蔽用の分厚いベストを着ていた。

事故前から福島第1原発で働く東芝の谷篤さん（46）は「以前と比べると、被ばく線量は格段に下がりました。廃炉作業は一歩ずつ進んでいる実感はありますが、溶融燃料の在りかや状態はまだ分かっていない。一日も早く最後の回収までやり遂げたい」と話した。

福島第1原発敷地内の作業員。全面マスクと被ばく予防のベストを着た重装備（左）と、鼻と口だけを覆う防じんマスクでベストを着用しない軽装備（名前などをモザイク処理しています）

福島第1原発の主な施設

大型休憩所
3階に食堂がある（写真は15年6月運用開始時）

タンク建設現場
作業員は全面マスクではなく防じんマスクを着用

タンクエリア
敷地はタンクで埋め尽くされている

3、4号機西側土手
土手の植え込みや樹木は伐採され舗装された

福島第1原発の廃炉作業　政府や東京電力が定めた廃炉工程では、使用済み核燃料プールに残る燃料や原子炉内の溶融燃料（燃料デブリ）を取り出し、1～4号機の施設を解体するまで30～40年かかるとしている。4号機プールからの燃料取り出しは終わったため、1～3号機のデブリ取り出しが最大の課題だが、現状ではデブリの状態や場所は分かっていない。建屋にたまり続ける汚染水に対応するため、構内で働く作業員数は増加しており、2015年9月時点で約7千人。2年前の約2倍になった。

学習会で現状発信

元東電社員が支援団体

AFW代表の吉川彰浩さん

東京電力福島第1原発の廃炉作業の現状を広く一般に理解してもらおうと、元東電社員吉川彰浩さん（35）＝福島県いわき市＝が団体を立ち上げ活動している。

「故郷を次の世代にどう受け継ぐかを考えた時、今やれることは廃炉作業で働く方を守り、情報発信をすることだと思いました」

そう話す吉川さんは茨城県出身。東電の職業訓練校「東電学園」を卒業した1999年に福島第1原発に配属された。2008年には福島第2原発へ。福島がもう一つの故郷になった。

福島の復興には第1原発の廃炉が欠かせないが、作業員の働く姿が社会に正しく伝わっていないと感じた。現場の物資は足りず、偏見を恐れ第1原発で働いていることを隠す人も多かった。

12年6月に依願退社し活動を始め、集めた募金で防寒用の下着を送った。原発勤務の知識を生かし、第1原発周辺の住民向けに学習会を開いた。

13年11月に仲間とともに団体を設立。名称は「Appreciate FUKUSHIMA Workers」（福島の作業員に感謝）とした。現在は頭文字を取り「AFW」となっている。

15年11月、初めて大学生向けに第1原発の現地学習会を企画し、原子力やエネルギーを学ぶ首都圏の19～24歳の男女約20人が参加した。

バスで建屋近くや汚染水保管タンクなどを見て回った。廃炉作業といえば、防護服や全面マスクなど重装備がイメージされるが、バスから出なければ今は通常のマスクで構わない。現場の変化を直接見てほしかった。

誰でも入れる現場ではないが、できるだけこうした機会を増やしたいと思っている。「働く方のイメージは変えられる。仕事の意義を伝え、働く方が胸を張れるようにしたい」と意気込む。